

日蓮大聖人御書全集

にちげんによぞうりゆうしやかぶつくようじ

日眼女造立釈迦仏供養事

新版
1609
ゝ
1612

にちげんによぞうりゆうしやかぶつくようじ

日眼女造立釈迦仏供養事

こうあん

ねん

がつ

にち

さい

にちげんによ

弘安2年('79)

2月2日

58歳

日眼女

おんまも

か

そうろう

御守り、書いてまいらせ候。

さんがい

しゅ

きようしゅしやくそん

いったいさんずん

もくぞうぞうりゆう

だんな

三界の主・教主釈尊の一体三寸の木像造立の檀那・

にちげんによ

ごくよう

おんふせ

さき

にかん

いまいつかんうんぬん

日眼女、御供養の御布施、前に二貫、今一貫云々。

ほけきよう

じゆりようほん

い

こしん

と

法華経の寿量品に云わく「あるいは己身を説き、あるい

たしん

と

とううんぬん

とうほう

ぜんとくぶつ

ちゅうおう

だいにちによらい

は他身を説く」等云々。東方の善徳仏・中央の大日如来・

じつぼう

しよぶつ

かこ

しちぶつ

さんぜ

しよぶつ

じようぎようぼさつとう

十方の諸仏・過去の七仏・三世の諸仏、上行菩薩等、

もんじゆしり

しやりほつとう

だいぼんてんのう

だいりくてん

まおう

しやくだいかんいんおう

文殊師利・舍利弗等、大梵天王・第六天の魔王・釈提桓因王、

きようしゆしやくそん

たてまつ

そうもく

教主釈尊をうごかし 奉れば、ゆるがぬ草木やあるべき、

みず

さわがぬ水やあるべき。

いま にちげんによ

さんじゆうしち

厄

うんぬん

もう

たと

今日眼女は三十七のやくと云々。やくと申すは、譬え

賽

角

升

隅

ひと

続

節

ほう

ば、さいにはかど、ますにはすみ、人にはつぎふし、方に

しい

かぜ

ほう

吹

弱

かく

ふ

強

は四維のごとし。風は方よりふけばよわく、角より吹けばつ

やまい

にく

お

じ

ふし

お

じ

よし。病は肉より起これば治しやすし、節より起これば治

いえ

垣

無

ぬすびと入

ひと

科

しがたし。家にはかきなければ盗人いる。人にはとがあれ

かたきたよ

受

厄

もう

節

々

いえ

ば敵便りをうく。やくと申すはふしぶしのごとし。家に

垣

ひと

とが

兵

士

守

かきなく、人に科あるがごとし。よきひようじをもつてまぼ

ぬすびと

擲

取

節

やまい

予

じ

らすれば、盗人をからめとる。ふしの病をかねて治すれば
いのち いま きょうしゆしやくそん ぞうりゆう たてまつ げによ たいし

命ながし。今、教主釈尊を造立し奉れば、下女が太子

産

こくおう

によ

うやま

たも

をうめるがごとし。国王なおこの女を敬い給う。いかにい

だいじん いげ

だいぼんてんのう

しやくだい いん いんおう

にちがつとう

わんや大臣已下をや。大梵天王・釈提桓因王・日月等、こ

によにん

まも

たも

だいしよう

じんぎ

の女人を守り給う。いわんや大小の神祇をや。

むかし

うでん だいおう

しやかぶつ

ぞうりゆう

たてまつ

昔、優填大王、釈迦仏を造立し奉りしかば、

だいぼんてんのう

にちがつとう

もくぞう

らい

まい

たま

もくぞうと

大梵天王・日月等、木像を礼しに参り給いしかば、木像説い

い

われ

くよう

うでん だいおう

くよう

とう

て云わく「我を供養せんよりは優填大王を供養すべし」等

うんぬん

ようけんおう

えぞう

しやくそん

か

たてまつ

云々。影堅王の画像の釈尊を書き奉りしも、またまたか

くのごとし。

ほけきょう い

ひと ほとけ

ゆえ

もろもろ

ぎようぞう

法華經に云わく「もし人、仏のための故に、諸の形像

こんりゆう

しよにんとう

みな

ぶつどう

じよう

を建立せば、かくのごとき諸人等は、皆すでに仏道を成じ

うんぬん

もん

こころ

いっさい

によにん

しゃかぶつ

つく

たてまつ

たり」云々。文の心は、一切の女人、釈迦仏を造り奉れ

げんざい

ひびつきづき

だいしよう

なん

はら

ごしよう

かなら

ば、現在には日々月々の大小の難を払い、後生には必ず

ほとけ

成

もう

もん

仏になるべしと申す文なり。

によにん

いちだいごせん

しちせんよかん

きようぎよう

ほとけ

そもそも、女人は一代五千・七千余卷の経々に「仏に

成

嫌

ほけきょう

によにん

ならず」ときらわれまします。ただ法華經ばかりに「女人、

ほとけ

と

そうろう

てんだいちしやだいし

しゃく

い

仏になる」と説かれて候。天台智者大師、釈して云わ

によ き

とううんぬん

しやく

こころ

いつさいきよう

によにん

く「女に記せず」等云々。釈の心は、一切経には、女人、

ほとけ

うんぬん

つぎしも

い

こんきよう

みなき

うんぬん

仏にならずと云々。次下に云わく「今経は皆記す」と云々。

いま ほけきよう

りゆうによ

ほとけ

うんぬん

てんだいちしや

今の法華経にこそ「竜女、仏になれり」と云々。天台智者

だいし

もう

ひと

ぶつめつど

のちいつせんごひやくねん

かんど

もう

くに

大師と申せし人は、仏滅度の後一千五百年に漢土と申す国

い

たま

いつさいきよう

じゅうごへん

ごらん

に出でさせ給いて、一切経を十五返まで御覧あそばして

そうら

ほけきよう

ほか

きよう

によにん

ほとけ

候いしが、「法華経より外の経には、女人、仏にならず」

うんぬん

みようらくだいし

もう

ひと

しやく

い

いちだい

た

と云々。妙楽大師と申せし人の釈に云わく「一代に絶え

とううんぬん

しやく

こころ

いつさいきよう

絶

たるところなり」等云々。釈の心は、一切経にたえたる

ほうもん

法門なり。

ほけきよう　もう　ほし　なか　つき　ひと　なか　おう
法華經と申すは、星の中の月ぞかし。人の中の王ぞかし。

やま　なか　しゆみせん　みず　なか　たいかい　ほど

山の中の須弥山、水の中の大海のごとし。これ程いみじき

おんきよう　によにん　ほとけ　と　いつさいきよう　きら

御經に「女人、仏になる」と説かれぬれば、一切經に嫌

苦　たと　ぬすびと　よう

われたるに、なにかくるしかるべき。譬えば、盗人・夜打ち・

べうとう　こつじき　かつたい　嫌　くに　だいおう　ほ

強盜・乞食・乞丐にきらわれたらんと、国の大王に讃めら

嬉

れたらんと、いずれかうれしかるべき。

にほんこく　もう　によにん　くに　もう　くに　てんしやうだいじん　もう

日本国と申すは女人の国と申す国なり。天照太神と申せ

じよしん　築　出　たま　しま　にほん　おとこ

し女神のつきいだし給える島なり。この日本には、男は

じゆうくおくくまんしせんはつびやくにじゆうはちにん　おんな　にじゆうくおくくまんしせん

十九億九万四千八百二十八人、女は二十九億九万四千

はつぴやくさんじゆうにん

なんによ みな ねんぶつしや

そうろう

みな

八百三十人なり。この男女は皆、念仏者にて候ぞ。皆、

ねんぶつ

ゆえ あみだぶつ ほんぞん

げんぜ いの

念仏なるが故に阿弥陀仏を本尊とす。現世の祈りもまたか

しやかぶつ

造 画

あみだぶつ

くのごとし。たとい釈迦仏をつくりかけども、阿弥陀仏の

じようど

往

おも

ほんい

おも

そうら

浄土へゆかんと思つて、本意のようには思い候わぬぞ。

なかなか

造

画

劣

そうろう

中々つくりかかぬにはおとり候なり。

いま

にちげんによ

こんじよう

いの

きようしゆしやくそん

今、日眼女は、今生の祈りのようなれども、教主釈尊

造

たま

そうら

ごしよう

うたが

にじゆうくおく

をつくりまいらせ給い候えば、後生も疑いなし。二十九億

くまんしせんはつぴやくさんじゆうにん

によにん

なか

だいいち

思

九万四千八百三十人の女人の中の第一なりとおぼしめす

くわ

もう

そうろう

きようきようきんげん

べし。委しくはまたまた申すべく候。恐々謹言。

こうあん^にねん^{つち}のとう^にがつ^ふつか
弘安二年己卯二月二日

にちげん^{によ}ごへん^じ

日眼女御返事

にちれん
日蓮

かおう
花押